

# 史遊会通信

NO. 215  
平成 24 年 12 月 24 日 行  
發

事務局  
(03)  
3712-0651  
下山田方

特集

## 今 年 感 動 し た 三 冊 の 本

鯨游海

① 「淨土真宗はなぜ日本で一番多いのか」

— 仏教宗派の謎 —

島田裕巳著 幻冬社

わが家の会津若松に在る菩提寺の善龍寺は

曹洞宗である。總本山は永平寺と總持寺で開

祖は道元。鎌倉時代栄西を祖とする臨濟宗の

弟分として座禅による悟りを目指す禪宗の思

想を説き、葬式や法要に独自の礼式をもたら

した。特に、武家の間で広まつた宗派。越後

の良寛も依拠した。

さて、この程度の知識しかなかつた私は、

この本によつて他の宗派のこと、ひいては仏

教の常識について殆んど無知であるの知つて

愕然とした。

喻えれば空海の開いた宗派は何で、本山は何  
処か。淨土宗は誰が開いたか、淨土真宗とど  
う違うのか。公明党の母体創価学会は何宗の

一派か。そもそも宗派は仏教に限らず何れの

宗教にも存在するが何故に生じるのか。

最澄、法然、親鸞、日蓮、一遍らの高僧は

何を説いて一派を成したのか。

密教とは、念佛とは、大乗小乗とは何か。

延暦寺、知恩院、金剛峯寺、圓城寺、金戒

した。特に、武家の間で広まつた宗派。越後

光明寺、東西本願寺、東寺、川崎大師、根来

寺、中尊寺、増上寺、平等院、建仁寺、建長

寺、円覚寺、東福寺、新勝寺、南禪寺、池上

本門寺、久遠寺、遊行寺、京都清水寺：これら

有名寺院は何宗の本山または有力寺院か。

更に薬師寺、興福寺、東大寺、唐招提寺、法

例会の、お知らせ

◎ 1月総会

日 時 平成 25 年 1 月 23 日 (水)

午後 6 時～8 時

会場 目黒区民センター 7 階

議題 \* 24 年度事業・会計報告  
\* 25 年度事業計画 他

総会終了後

講演 中山喬央氏

テーマ ウィリアム・ガーランド

と大塚初重

自由執筆 小田紘一郎・鯨游海

平山善之の諸氏

◎ 2月例会

日 時 平成 25 年 2 月 27 日 (水)

午後 6 時～8 時

会場 目黒区民センター 7 階

社会教育館 第 2 研修室

講演 柴田弘武氏

自由執筆 三戸岡・隆・中込の諸氏  
の予定。正式の発表は総会で確認後

隆寺等の奈良に在る著名寺院と前述した名刹との相違は何か。学者や僧籍に在る専門家を除き一般人で答えられる人は稀であろう。また駒沢大学、鶴見大学、東北福祉大学、愛知学院大学この四大学の共通項は何かに答えられる人は多くはあるまい。

この書のお蔭で、無宗教派に近い怠惰な仏教徒たる私でさえ右の疑問に答えられるようになつた。更に各宗派の主張、思想、歴史等の概要を知ることが出来た。とり敢えず最低限の仏教入門書としてお奨めする次第。

②「百年前の日本語」今野眞二著 岩波新書

漢字仮名交り文は、或る日忽然と出来たものではない。多くの先人たちの嘗々たる努力によつて少し改良され進歩して、今日に至つた。百年前でさえ今からみれば奇妙奇天烈なものであつた。さて百年後はこれがどう変化していくのだろう。想像するだに楽しくなる。

③「論語の新研究」宮崎市定著 岩波書店

二十世紀最高の論語研究者、宮崎先生畢生の大著。何度読んでも難解だが、同時に興味の尽きる所がない。推理小説よりも遥かにスリリングで如何なる小説よりも面白い。論語は精神生活に不可欠のヴィタミン剤だ。

柴田 弘武

①「草枕と旅の源流をもとめて」吉田金彦著  
(勉誠出版・一〇〇四年刊)

吾が恋はまさかもかなし 草枕多胡の入野  
の奥もかなしも

(「万葉集」四一一 3403 澤潟注釈)  
群馬県吉井町の多胡碑を見に行けば必ず出くわす万葉歌である。著者はこの歌を導入として、旅の枕詞として、誰も疑問を抱かない「草枕」であるが、では「クサマクラ」の語源は何だったのかを、多胡碑の存在と関連させながら解明していく。

原文は「安我古非波麻左香毛可奈思久佐麻久良多胡能伊利野乃於父母可奈思母」であつて、「おくもかなしも」ではなく「おふもかなしも」であることにまず注意をうながす。結論として「於父（おふ）」は地名で多胡郡大家郷をさすとする。「草枕」はアイヌ語（古代縄文語）で「クサ（渡し・超えて行く）マ（潤）クラ（谷）」で、「馬庭の渡し」そのものを指しているという。「入野」も多胡郡が渡来人や俘囚の「入り地」であつたことを示す語であるという。

従つて歌の意味は「私の恋は、目の前の馬庭の川岸においても切なく思つります、谷の

渡しを超えた、多胡という入野の大家についても、切なく思つております、ああ、それなのにー」だという。そして「渡河できずに入る女の立場からの歌だと見る時、よく分かる歌になる。若いカップルの恋」というより夫の労働か官務かを思い遣る歌で、離れていてどうにもならないことを嘆く歌がある」と解説する。

②「戦後史の正体」

孫崎享著

世評高い本である。元外務省・国際情報局長が執筆しただけあって、一般には知られていなかつた外交事情がふんだんに盛られ、へつえー、そうだったのか！と驚かされる。例えば冒頭、一九四五年九月一日の降伏文書調印式直後のアメリカの占領政策は「日本を米軍の軍事管理のもとにおき、公用語を英語とする」「米軍に対する違反は軍事裁判で処分する」「通貨を米軍の軍票とする」というものであったという。これに対し重光葵外相は終戦連絡事務局長の岡崎勝男長官と共に、九月三日にマッカサーに直接会いに行って捨て身の交渉をし、これを撤回させたという。

「ここから始まって現在までの六七年間の日本の中、いかに対米追随派と自主派（一部抵抗派もあつた）の対立で推移してきたかが述べられる。先の重光は当然として、岸信介も自主派に入っているのは意外であった。

対米追随派は吉田茂・池田勇人・三木武夫・中曾根康弘・小泉純一郎である。後者の内閣はいずれも長期政権である。そして今や外務省の中には自主路線を唱えるものはいなくなつたという。ああ！

### ③ 「東京満蒙開拓団」

東京の満蒙開拓団を知る会著  
(ゆまに書房・二〇一二年刊)

前著が戦後史の秘密を解明したものであるのに對し、本書はその戦前史の隠れた史実を掘り起したのである。著者達は自分達の住む東京都大田区に満蒙開拓団の訓練所があつたことをたまたま知り、それから市民グループをつくり足かけ五年にわたりて調査を行い、見事に埋もれていた史実を明らかにした。恐慌期の失業対策から始まり、最後の強制疎開の人びとまで彼らは正に国家による棄民であつた。今まで原発被害者の棄民が始まつている。

三戸岡 道夫

「アストロバイオロジーとはなにか」

瀧澤美奈子著

しかしアストロバイオロジーでは、両者は断絶してはおらず、連續しているというのであり、それを読んだとき、私は、「え、えつ…、うそ！」と驚いた。

副題に「宇宙に、生命の起源と、地球外生命体を求める」とあるように、宇宙の神秘を追求した壮大な著書である。しかし、私たち素人にも理解できるように著者が配慮して書いてある、有難い本である。

その中の特に「生命の起源」の部分が強烈であるので、そこを若干紹介してみたい。

宇宙の中で、地球に生命が誕生したのは、それは神祕ではない、化学反応の連続の一種であるとの説明に、読者の心を引きつけて止まないものがある。

常識的に地球上の物体を分類すると、無機物と有機物に分けられる。無機物は、気体、液体、固体の三つであり、有機物は植物と動物という、いわゆる生物である。

しかし無機物と有機物の間には、絶対的な

区別がある。それは生命の有無である。何十億年という長い宇宙の歴史の中で、突然変異によって生物が生まれた。その生命の有無によって、有機物と無機物は断絶している。以上が常識的に考えられている説明である。

すなわち無機物と有機物は、断絶しているのではなくて、連續しているのである。

現に低位の生物、たとえばバクテリアの中には、「生きている」と「死んでいる」との、ちょうど中間の状態のものが、結構たくさん

いる。バクテリアは凍結乾燥すれば、物質のようには生きることが出来る。高等な生物の細胞でも、なにか生物学的な手続きをすれば、そのような事が可能な筈である。

(バクテリアは生と死の連続の中で、自由に行き来している。では、バクテリアだけではなく、人間も……)

と考えることは、できないだろうか。

多種多様の微生物は、命を維持するための機能を、互いに補い合いながら生きている。共生である。単体では生きられないからである。従つて原始生命は、多数の不完全な細胞の共生体であつたのかもしれない。

そのような物質の相互作用によつて最初の生物が出来、次第に生きている状態になつて、最後には自己増殖が、他の手助けなしに始められるようになり、現在の生物に到達したのである。

M 生命とは物質が、物質と生命の間を行きつ戻りつしながら、生命になつていつたものである。

以上は本書のほんの一部分を紹介したにすぎないが、これだけでも我々の「生命への認識」がガラリと一変する必読の書である。

新井 宏

場合、解説までついている。年を取つたら読もうと思って、購入し続けてきた『文学全集』がついにゴミと化する。

### ①『小さな村の物語イタリア』

BS 日テレ、毎週土曜 21 時 (アンコール)

放送毎週日曜 10 時)

ついに、私の「三冊の本」の欄にテレビやインターネットが登場する。

昨年は、ブックオフやアマゾンで買った古本のことを紹介した。いずれも数百円以下で、翌日配達などのサービスも利用でき内容も優れたもので大満足であった。

しかし、お年玉を貰うと真っ先に「古本屋」に飛んでいつた記憶からすると、「本が変わってしまった」と痛感した。

いつも美しい風景だ。そしてその風景に見合つて、貧しくも豊かな人々の素朴な生活や人生を見る。間違いなく詩である。

低俗だとばかり思つていたテレビに、どう

してこんな上質な番組があるのか驚きであつた。「小説類」を読まなくなつてもう二十年。

来年も楽しめそうである。

②『日輪』 横光利一著  
www.aozora.gr.jp  
高校一年生の夏、国語の研究テーマとして選んだのが『日輪』であった。

「此處を去れ。此處は爾の」とき男の入るべき處ところではない」  
ターネット上でタダで読める。しかも多くの

「私は帰るであろう。私は爾の管玉を奪え  
ば爾を置いて帰るであろう」

新鮮な表現に魅せられて、結構長文のレポートを書いたが、手元には何も残っていない。  
再読して感傷にひたる。

『古事記』『徒然草』などばかりでなく、著作権の切れた森鷗外、夏目漱石、太宰治などの名作が字を大きくして手軽に読める。

『風立ちぬ』も良かつた。まだ「電子ブック」は利用していないが、時代は変わった。

### ③ ANCIENT MESOPOTAMIAN MATERIALS AND INDUSTRIES, P.R.S.MOOREY

いきなり、英語の本で失礼。この書名は例示にすぎないが、まだ著作権が残っている本でも、広告扱いで無料で読める場合がある。本書の広告だから全ページが見れるわけではないが、著書の半分近くが載せていて、これで用が済む場合が多い。外国の書物は購入に手数がかかり、高額であるから大変に助かる。

また日本の著書なら、比較的新しい本でも全ページを載せている場合もある。もう間もなく、活字本で三冊を紹介する時代は終わる予感がしている。

- ① 「東北『海道』の古代史」**  
平山 善之  
J・ダイアモンド 草思社文庫  
平川 南 岩波書店
- ② 「銃・病原菌・鉄」上・下**  
沖 大幹 新潮選書  
J・ダイアモンド 草思社文庫
- ③ 「水危機ほんとうの話」**  
沖 大幹 新潮選書  
J・ダイアモンド 草思社文庫

「ヤマトタケルの東征の道は、七世紀前半くらいの歴史的事実を、仮託して歴史書に記載されたものと理解できよう」という説明は眞実と肯ける。

② 約一万三千年前、人類はどこでも同様の生活をしていたが、その後、各大陸で異なる発展を遂げてきた。それは何故か。

本書は、進化生物学者であり、考古学、言語学等にも詳しい著者による回答である。

著者は人種の違いによるとする説を否定する。そして地域によって栽培化や家畜化の候補となりうる動植物の分布状況が違つたからだ、という。狩猟生活から食料生産への移行は余剩食糧をもたらし、文化・文明を生み出したというわけである。また大陸ごとに、地形の為食料生産や発明の伝播や拡散に差があつたことも影響したと説く。

幅広い学際的知識を駆使しての論述は極めて説得力に富み、壮大な人類史として興味深く読んだ。この本は、朝日新聞が二〇一〇年に「過去十年のベスト五十冊」を選んだ際にベスト一位に選ばれた。

③ は水研究者として有名な東大教授の近著。著者は、私の旧上司で今もお付き合い頂いている、沖 明氏の「令息」。一読して、目か

仙、牡鹿、行方、磐城の五地域に分れる。  
発掘された墨書き器や漆紙文書の片言隻句から発信者・名宛人や文書の意味を解明する手法にまず感嘆させられる。そして、その結果から、七〇世紀に太平洋沿岸に紀州から三陸まで「海の道」という大道があり、多くの人々が往来したことが明らかにされる。上総の九十九里地方は中継点であつたことも、人名や地名から、また人面土器の分布などから証明される。

五地域はいずれも大和朝廷の国府や郡家として或いは製鉄所として機能した。戦火の跡などもみられることから「えみし」と呼ばれた土着民との抗争の歴史も語られる。

らウロコが落ちるというか、大いに啓蒙されるところがあつた。

例えば、「節水は善行で、たくさん水を使いるのはいけないことだと無批判に思つていい。」水不足で苦労している話を聞き、まず節水を、と考える。しかし、水不足と節水は直接関係がない。水は大気と異なり、ローカルな資源、という。また、「木があれば豊富に水が使えるのではない。」「放置された森林の地面には『緑の砂漠』が広がっている。」「（水不足は）水を使いつくしてしまふからではない。水資源開発やその機能維持への投資が不十分な状態が続くと起こる。」「地球の水は無くならない。」等々。

我々の疎んだ知識や思い込みの原因にはメディアの責任もある。

筆者に「水危機・水紛争は必ず起る」と言わせたいインタビュアーが、慎重に回避する筆者に腹をたて、「もう結構です。先生、頭良いですね」と捨て台詞を残して帰つたといふ。メディアはニュースになれば書く、あるいはニュースになるように、捻じ曲げることがある。我々も心して危機を煽るメディアに踊らされないようにしたい。

「落花は枝に還らずとも

中島 茂

会津藩士・秋月悌次郎 上・下

中村彰彦著 中公文庫

私もこれまで幕末会津藩の悲劇は、司馬遼太郎の「王城の護衛者」等でそのあらましを理解していたが、中村氏のこの書によつて、その詳細をしることができた。

この書は幕末の政情に深く分け入りながら、会津藩公用方として時代の変転を一身に体現した秋月悌次郎（胤永）の足跡をつぶさに語つている。

薩会同盟も薩摩側にとつては無用の長物となり、薩摩藩はひそかに長州藩と提携した。大政奉還後の情勢は会津藩にとつてさらにきびしく、官軍として長州藩と対決してきた

会津藩は今や薩長側から賊として討たれる対象とされていく。

利となつたが、順風は続かなかつた。

当の会津藩内でも、国もと詰めの者たちと、京都番の者たちとの間はとかく意思の疎通を欠き、悌次郎自身も禁門の変後公用方を追われ、さらに遠く東蝦夷地斜里の代官に左遷される。

二年九か月ぶりに公用局に復帰したときは京都の政情は大きく変わっていた。将軍家茂と孝明天皇の死によつて公武合体の二本の柱がともに倒れた。

薩会同盟も薩摩側にとつては無用の長物となり、薩摩藩はひそかに長州藩と提携した。大政奉還後の情勢は会津藩にとつてさらにきびしく、官軍として長州藩と対決してきた

会津藩は今や薩長側から賊として討たれる対象とされていく。

会津藩の誠実・律義——それは愚直にも通じるが一は、自らの足もとに滅びの淵を掘つていたのである。

孤立した会津藩はついに新政府軍との方に一つの勝ち目もない戦いを余儀なくされた。

この間文官の秋月悌次郎の出番はなかつたが、惨憺たる会津戦争の敗北により、再び歴史の表舞台に登場する。今回は降伏調印式の代表者という苛酷な使命を果すためであつた。

秋月悌次郎は最後の会津藩主松平容保に仕え、中土の出ながら藩きつての秀才だったことから昌平坂学問所への留学を命じられる。遊学十余年、この間諸藩の知名の士とも知り合い、親交を結ぶ。

やがて会津藩公用方に抜擢され、幕末京都の騒然たる状況の中に身を置いた。

文久三年八月、薩摩藩士高崎左太郎を通じての「薩会同盟」の蔭の立役者となり、「八月十八日の政変」を導く。

この政変は血を見ることなく薩会同盟の勝

その後藩は陸奥の最北端斗南に遷され、藩主父子をはじめ主だった人々は他家お預け謹慎の身となつた。

悌次郎は四年に近い謹慎の後自由の身となり、名を胤永と改めた。

彼の学徳を惜しむ人々の推挙によつて新政府の教部省教導職に登用され、さらに、明治十八年東京大学予備門教諭となり、二十三年には新設された熊本第五高等中学校（のち五高）の教諭となり、九州の子弟の教育に心血を注いだ。

敗戦後、彼は母にあてた手紙の一節に「今日の落花は来年咲く種とやら」と書いたが、故郷を遠く離れた九州の地で再び見事に花開いたのである。本書の題名のゆえんである。

その温容は同僚のラフカディオ・ハーンから「神のような人」と評された。

ところで、来年のNHKの大河ドラマは、「八重の桜」、ヒロインを演じるのは綾瀬はるか。幕末の会津藩に生まれた山本八重（のちの新島八重）もまた「落花は枝に還らずとも」の話のように波乱に満ちた生涯を送つた。テレビが彼女をどのように描くか今から楽しみである。

（友の会）

## ①『神々の明治維新 —神仏分離と廢仏稀釈—』

安丸良夫著

岩波新書

私達は、今ある神社の形態が日本古来の信仰の形であると思いがちであるが、6世紀半ばの仏教伝来以来幕末まで、神仏習合により神社とお寺は一緒に祀られていた。

が、明治維新前後に日本各地に神仏分離・廢仏稀釈の風が吹き荒れ、地域差があるにせよ、かなりの仏像や石像が、地中に埋められたり川に流される等して破壊された。また、堂宇も焼かれる等した。一方で新政府は、神社に社格を設けて位付けをし、『國家神道』をもつて新たな国家形成を図ろうとした。社殿と鳥居というスタイルがこの頃に出来上がり、氏子制度やお宮参りや七五三という風習も、この時に編み出された。また、欧米に追いつくためには、西洋の近代的合理主義的な知識や文化を取り入れて、近代国家を目指したが、キリスト教も一緒に流入し、キリスト教徒が増加することを恐れた。寺は仏教によつて神々を守るとして、寺の再興を政府に要請し、復興できた宗派もあつた。ところで、新政府が廢絶しようとしたのは仏教だけでは

塩原 直子

なく、牛頭天皇を祀る社も徹底的に廢絶しようとしました。そして村人等が信仰していた村の鎮守の神々も「淫祠」として廢絶した。さらに修驗道も活動を禁止された。明治維新は、神仏分離と廢仏稀釈という復古的な宗教改革を通じて、近代国家を目指したのである。私は、現存する日本各地の寺社を拝観する時はただ御利益を求めるだけでなく、この明治維新の前後でどんな変化があつたかを意識して、可能なら資料等を調べた上で拝観する必要性を感じた。

## ②『アイヌの世界』

瀬川拓郎著

講談社選書メチエ

『アイヌの歴史』について、最近のDNAの研究や考古学的調査の結果、従来のアイヌの世界觀が変わつて来ている。アイヌは縄文人の直系の末裔と見なされがちだが、そう簡単な図式ではなく、続縄文文化を経て、才ホーツク人のことの影響を受けながら擦文文化を形成し、アイヌ文化へと引き継がれていったとする。蝦夷は古墳社会の人々で日本語の古語を使用していた。アイヌ語は縄文語だとされるが、日本語古語も含まれていると

「箸」、「カムイ＝神」)王権側からは、蝦夷は異民族視されていたが、蝦夷の文化は古代日本文化であつたという。空白地帯のように見える北海道周辺は、北方民族が交易の霸權を巡つてせめぎ合つていた地域であつた。アイヌは積極的な交易活動をし、アムール川まで進出していたといふ。北方地域からの新たな歴史的観点が、非常に興味深かつた。

### ③『幕末の探検家 松浦武四郎と一疊敷』

DNAZギャラリー

松浦武四郎(北海道の命名者)は幕府の命で、蝦夷地を探検した。アイヌの人々の生活を見聞し、松前藩によりいかに搾取されているかを、幕府に報告し改善を訴えた。また、晩年に近くに東京神田の自宅に、友人達の協力を得て、日本各地の神社仏閣の廃材を集めて、『一疊敷』の書斎を作つた。その事の『木片勧進』を記している。そして自分の死後は、その書斎の廃材で火葬にし、遺灰は奈良県の大台ヶ原に散骨して欲しいと遺言した。この本には、書斎の様子、松浦武四郎の愛用の傘、蝦夷地探検時の野帳図等が掲載されていて楽しい。

(友の会)

- ①『日本古代史を科学する』**  
中田力著 PHP新書
- ②『魏志倭人伝の謎を解く』**  
渡辺義浩著 中公新書
- ③『邪馬台国をとらえなおす』**  
大塚初重著 講談社現代新書

今年も多くの邪馬台国に関する本が出版されたが、右記三冊は自然科学、中国古代史、考古学の立場から、新書版ながら注目すべき多くの示唆を与えてくれる。

最初の著者は脳神経科学の世界的権威で、現在新潟大学脳研究所センター長である。著者は『魏志倭人伝』を、これまでの権威主義的解釈を排除して、科学・技術・社会学的常識のみを前提として、邪馬台国まで辿つて行こうとするのである。

定説では伊都国は前原市、奴国は博多付近に比定されてきた。しかし方向と陸行の記載から、唐津街道を南に下つた内陸地の佐賀平野にあるとする。伊都国は山地に接しており、一大率にもよく合致する。奴国は博多付近の奴国とは別国で、二国あつたとも考えられるとする。確かに邪馬台国周辺諸国の記載にも奴国が登場しており二国説は面白い。

不弥国以降は有明海を水行する。一日を約三キロとすると、投馬国は熊本市、そして邪馬台国への水行十日陸行一月は八代市まで舟で進み、上陸後球磨川沿いに人吉街道を一月進むと宮崎平野の日向灘に辿り着く。ここが科学的に読み進んだ邪馬台国であるとする。著者が自然科学的方法から邪馬台国へ辿る主張には一貫性と説得力がある。今後も自然科学系からの視点や分析が待たれる。

次の著者は中国三国時代の専門家である。倭人伝は六十五巻に及ぶ『三国志』のなかの「卷三十烏桓・鮮卑・東夷伝」の一部である。「倭人の条」であり、約二千字に過ぎない。倭人伝の記述は、三十七万字に及ぶ『三国志』のほんの一部分(0・5%)に過ぎず、邪馬台国を記録するために書かれた史書ではないことも認識しておく必要があることを強調している。そして編者である陳寿は使者の報告等に基づく部分と、当時中国の世界観による観念的叙述を混在させており、この二つを分けて検討する必要性を説く。さらに陳寿は西晋の史書編纂部門の官僚であり、複雑な政治状況を念頭に、その立場を理解しながら読む必要があることを詳細に論じる。

長く論争が続いた畿内説、九州説の論点も

新たな視点からの検討により粗方解決する。

この本は昭和四十五年三品彰英が『邪馬台国研究總覽』で「撰者の考への」とく読む」とが重要である」との指摘を、ようやく満足させる本である。

最後の著者は日本古代史の第一人者である。邪馬台国研究の現状は、文献史学上からも考古学からも双方互いに推測に推測を重ねて迷走しているとして、発掘により出てきた「モノ」でこの謎を解けと主張する。考古学の最新研究成果を柔軟かつ厳密に検証し評価している。特に歴博の炭素年代分析法による箸墓古墳の築造が、二四〇～二六〇年とする発表に対しても全幅の信頼をおいてない。発掘された布留式土器、銅鏡、「径百余步」とする墓の所在など未解決な問題が多く残り、纏向遺跡出土の柱穴を軽々しく卑弥呼の館等発表すべきでないと警鐘している。

原文の解釈や東南アジアの情勢等幅広く言及されおり、最新の邪馬台国研究書であり、レベルの高い格好な入門書にもなっている。

中山 喬央

①『古語拾遺』  
②『古語拾遺』

二宮一 民校注  
加藤玄智校訂

①は天理図書館蔵、嘉禄本古語拾遺を底本とし、②は前田侯爵家秘蔵の三種の古語拾遺巻子本を底本としている。

古語拾遺の諸本は大別して二系統あり、一はト部本で、其の代表が嘉禄本である。二は伊勢本と呼ばれ、その代表に亮順本がある。前田育特財団から大正十五年朱入りで複製された。

古語拾遺は次の様に人口に膾炙されている。

「歴史書。斎部広成（いんべのひろなり）著。一巻。807年（大同二）成る。古来中臣（なかとみ）氏と並んで祭政にあずかって來た斎部氏が衰微したのを嘆き、その氏族の伝承を記して朝廷に献じた書。記紀にみえない伝承も少なくない」

一方加藤玄智は②十四～十五頁にかけて、本書成立の時代と環境の中で次の様に述べている。

「平城天皇の御世に先だつた桓武天皇の御治世は、当時の外国文化の影響が頗る大であった時代である。先ず第一に桓武天皇の御生母高野皇太后は、河伯の女が太陽の精に感じ

て生んだと云ふ百濟の遠祖都慕（とぼ）王の

血統で居られるから、自然韓文化の感化が宮廷に及んでをつたことが想ひ起される、斯くの如きは明らかに支那思想の影響が、甚しかつたことを反影してをるものである。うそくの反動で他方では、斯る外来思想の浸染を防遏し、我が国粹に、三韓人や支那人をして一指も染めしめざらんとする思想界の傾向が平城天皇の時代になつて、見えて来た」

次に、記紀に掲載されていない本書記載事項で、気が付いた点を一箇所だけ挙げる。

日神の石窟幽居の項、「天目一個神（あめのまひとつのかみ）をして雜の刀・斧また鉄の鐸（さなき）を作らしむ」

これは神代の時代に鉱山師が居た事を明らかにすると共に、銅鐸にも繋がるものと考えれる。鐸の振り仮名の「さなき」は矛につけられた大鈴を意味し、振り仮名が「ぬて」であれば、呼び鈴的な用途で使われている。これは銅鐸・小銅鐸の流れを追うものと愚考する。

③真繼家と近世の鋳物師  
笛本正治

最近国分寺を含む、古代寺院の研究が進んでいる。その中で絶えず気にかけていたこと

に梵鐘の鋳造があつた。

この本にはその内容が記されているだけではなく、最後は①②の斎部氏と繋がることが記されていて、筆者を驚かせたのである。

日本で天児屋根命がはじめて鋳物の器を使用し、『養老令』によれば、大藏省のもとに典鋳師が置かれ鋳工が所属していたが、中世には國家が紀氏（新見家）を通じて鋳物師を支配していた。

しかし朝廷の力の弱まりは、そのまま紀氏の鋳物師支配の弱体化に繋がり、戦国大名達は鋳物師を直接支配し、鉄砲の玉、大筒の铸造に当らせるようになつた。

ここで登場した下級公家・真継家は、それまで鋳物師を支配してきた新見家の家督を簒奪し、主筋にあたる柳原家を利用し、正親町天皇の即位を契機として、鋳物師への支配力を確立する。

しかし「方広寺の鐘事件」で全面的に梵鐘鋳造に協力した真継家の鋳物師に対する影響力は、慶長十九年を境にして急激に減少し、以後、真継家は別勅によって得ていた斎部姓を生かして、伊勢皇太神宮の奉幣使として生き延びる事となる。

### 事務局だより

※八月の幹事会で次のような事柄が話し合われました。

講演者は前月に講演の趣旨を数行にまとめて通信に発表する。それによって聞く側もそれをなりの心の準備（？）ができるのではないかと。

そこで第一回の試みとして、一月の中山さんに書いていただきました。総会でも話しあわされることがでしようが、以後も続けることになるやもしれません。その節はよろしくお願ひします。

### ※一月の講演趣旨

中山喬央

お詫び

題名「ウイリアム・ゴーランドは何故、浜田青陵から日本考古学の父とよばれたのか」ゴーランドの研究は、天皇陵と日本の金属文化発生、であり、その内容は、現在の日本考古学会定説と大きく異なるものであつた。

NHKスペシャル「大英博物館」放映についての先行研究及び天皇陵、日本の金属文化発生についてのゴーランド説を考えてみたい。

年内に発送出来てホッとしています。

※会員の活動  
▽新井宏氏

講演 考古学における新年代論の諸問題  
日時 平成25年1月26日（土）  
14時30分～16時30分

場所 愛媛大学  
主催 愛媛大学東アジア古代鉄研究センター及び瀬戸内考古学研究会共同

※二〇一二年一二月一二日（水）、数字の重なった特異日（？）に恒例の忘年会が学士会館で催されました。参加者は十九人。今年も残すところあとわずかになりました。新しい年がより良き年でありますよう祈っております。

機械の調子がわるくなつて会報の発行が大変遅くなつてしましました。

早くから原稿を頂いておきながら、

すみませんでした。